

瀬底正武

1 成熟度調査

ヒトエグサの人工採苗試験は、51年度から実施し、これまで保存作業の中で一番ウエートを示る雑藻駆除方法については、一応成果を得たが藻体の成熟時期の把握が十分でないため、いまだに多量接合子付けができず人工採苗技術の確立を計る上での大きな要因となっている。そういった見地から53年度は同調査を重点課題としてとらえ、その把握につとめた。以下その概要を報告する。

1) 調査方法

調査場所は恩納村山田を選定し、毎月3回定期的に藻体をランダムに採取し、その放出状況を観察した。

採取した藻体は持ち帰った後、かるく洗浄したのち、1晩～2晩暗処理し、その後は白色蛍光灯（照度5,000～7,000 LUX）下にセットし配偶子を放出させた。

実験藻量は30g（半乾燥の状態）とし、配偶子の計数は完全に放出させた配偶子を抽出個定し、100ccの配偶子液を作り×600で30視野について計数しその平均を算出した。

2) 調査結果

配偶子の放出と藻体の成熟状況は図-1.2に示されるように放出の盛んな時期は4月がピークとなり、6月中旬頃までみられ、その後は流失期に入る。また、3月頃の藻体はほとんどが若藻体のためか放出量も非常に少ないようである。

成熟度調査は、継続調査として、後1～2年実施しなければ断定はできないが、一応今回の調査で言えることは、藻体の成熟期は、4月から6月中旬頃まで特に4月に放出のピークがみられることからとりあえず、その時期を母藻採取時期として設定し、5月6月についても、今後追跡調査を実施し、明確な母藻採取時期を明らかにしたい。

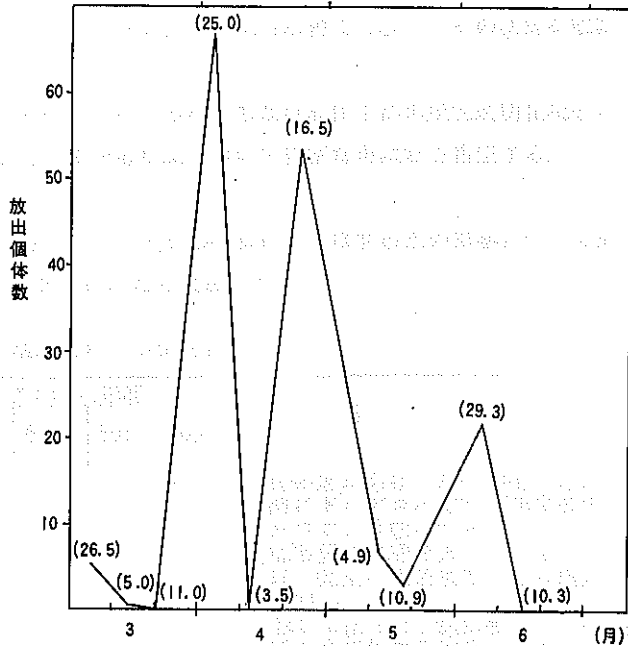


図-1：月別配偶子の放出状況 (注)：() は月齢

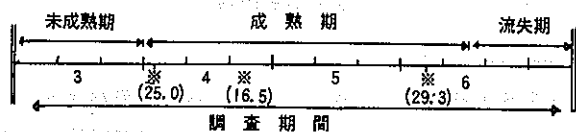


図-2：藻体の成熟状況

※：接合子付け実施、() は月齢

3) 要 約

- (1) 配偶子の放出の盛んな時期は4月がピークとなり、6月中旬頃までみられる。
- (2) 流失期は6月中旬以降7月初旬頃まで
- (3) 母藻採取時期は4月～5月頃までが適当な時期ではないかと考える。

2 養殖適位置の調査

同調査を51年度～52年度は、恩納村屋嘉田と沖縄市の泡瀬内海において実施し、現在その結果にもとずいて養殖活動が行なわれている。52年度から53年度は勝連村のカンナ崎入江において同調査を実施したのでその概要を報告する。

調査にあたり積極的な御協力をいただいた勝連村漁協理事東弘氏に対し深く感謝いたします。

1) 調査方法

調査は前回とほぼ同様な方法で実施するとともに今回は図-3に示されるように、調査網数を増やし広範囲にわたり網を設置し種場と本張り地の選定を重点に実施した。

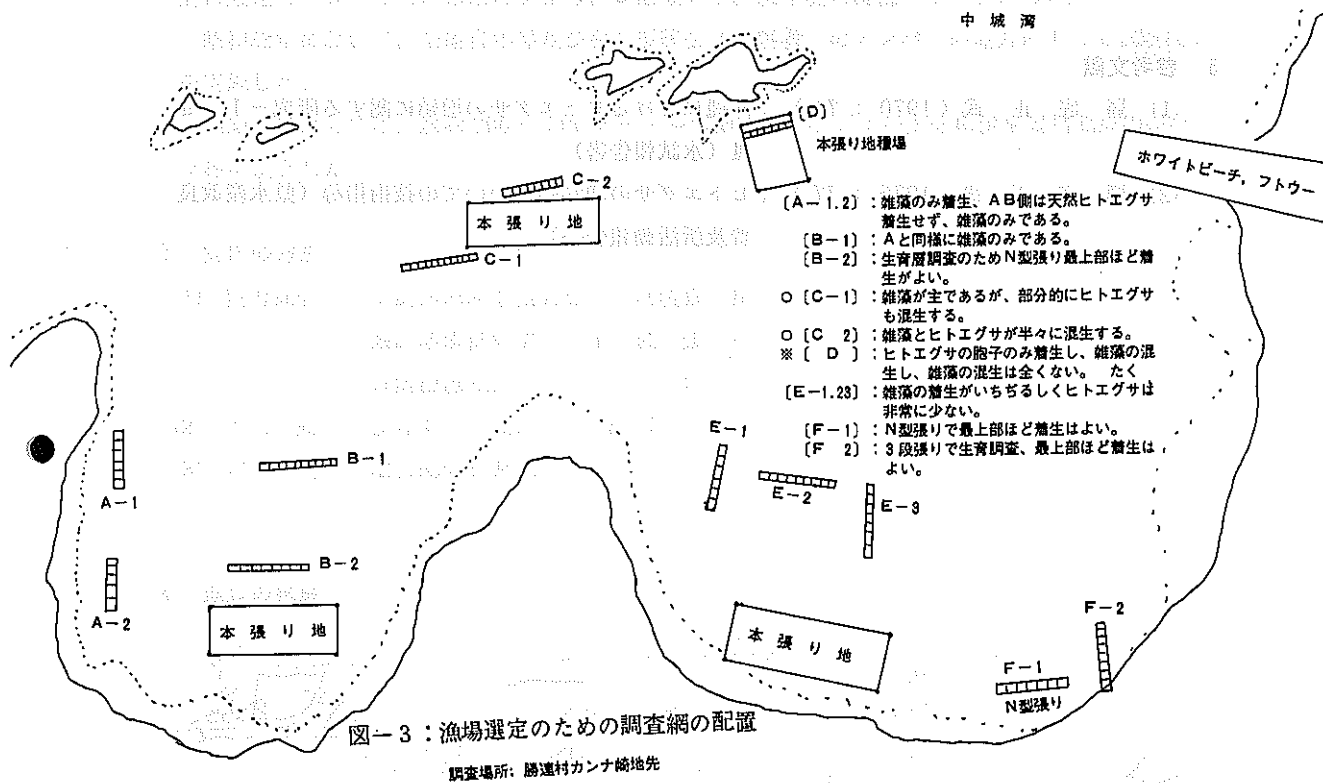


図-3 : 漁場選定のための調査網の配置

調査場所: 勝連村カンナ崎地先

2) 調査結果

この地域は、恩納、本部、沖縄市に比べ生育層が高かく（80cm以上）当初張り込み高さでは雑藻類の着生がいちぢるしいため、張り込み2週間後に再び網を張りなおし、その状況を観察した。その結果〔A-1.2〕と〔B-1〕の地点では孢子の着生はまったく確認されず雑藻類のみであり〔B-2〕のN型張りの網では最上部（80~90cm）のみに僅かに孢子の着生がみられる。〔C-1.2〕は雑藻類と半々に混生し〔E-1.2.3〕地点においても雑藻類の着生がいちぢるしく〔F-1.2〕は、上部に僅かに孢子の着生が確認された。したがって、今回の調査で分かったことは、網設置場所周辺の石や岩板上に雑藻類の繁茂がいちぢるしい地点ほどヒトエグサ孢子の着生が非常に少なく逆に、D地点やF地点のように周辺の石や岩板上にヒトエグサの繁茂が、いちぢるしい場所ほど孢子の着生が多いことから当入江で養殖する場合には、D地点を種場とし、B、C、Eの地点を本張り地としての漁場利用が考えられる。

3) 要約

- (1) 生育層が恩納、本部、沖縄市に比べ非常に高いことが分かった。
- (2) 漁場周辺における雑藻類の着生、生育の状況により種場としての適否の指標になると思われる。
- (3) 当入江では種場と本張り地を別々に設定する必要がある。

3 参考文献

- (1) 瀬底正武（1970：71）；沖縄におけるヒトエグサの増殖に関する研究-I、II、III（水試報告書）
- (2) 瀬底正武（1976：77）；ヒトエグサの増養殖についての技術指導（県水産改良普及所活動報告書）